

## 双葉山を見習え

JJ1SXA/池

前年まで、66連勝記録を続けていた双葉山は、翌昭和14年1月場所も初日から3連勝で、連勝記録を69に伸ばし、出羽の海部屋の新鋭、西前頭3枚目の安芸ノ海との一戦に70連勝をかけたが、双葉山は負けた、得意の右を差し、すくい投げを打ちにいったところ、前に出た右足を安芸ノ海の左外掛けが襲った、必死に右足を跳ね上げ逆転をはかったが、そのまま先に倒れたのだ。

双葉山は流石に落胆したのか翌日から2連敗するなど、この場所は9勝4敗に終わる、だが、凄いのは次の5月場所からすっかり立ち直り、その後も29連勝と36連勝を記録していることだ。

全盛時で体重130キロ前後と、当時の幕内力士の中でも、さほど大きな体では無いが、相手に突っかけられても、決して「待った」をしない。

勝つために立ち合いに変化したり、はたいたりもしない、あくまで右四つ、左上手から攻める正攻法だった。

今の力士は、立会いで相手と呼吸を合わせることも、自分の呼吸に相手の呼吸をずらさせることを念頭に駆け引きしているケースが多い。

確かに、はたき込みも引き落としも、あるいは変化も、相撲の手ではあるが、それがメインの技では情けない。

相撲は、単なるスポーツでは無い、心得違いの力士が多すぎる、横綱白鳳は流石だ、同じモンゴル出身でも、朝青龍とは違う、相撲道を良くわきまえている、日本人力士は見習えと言いたい、昭和の大横綱大鵬の優勝回数に並び、更に上積みするであろう、また双葉山の69連勝に迫る63連勝も記録している。

外国人力士が悪いわけでは無いが、日本人横綱の誕生を期待する、野球やサッカーの方が格好良く、相撲は子供達にとってはイマイチか？

私の年代の田舎育ちの者にとって、相撲は馴染み深いスポーツだった、スポーツというより遊びだったと言ったほうが早い、遊びは相撲しか無かったのだ。

当時の小・中学校には、土俵があった、四本柱が立っている本格的なものだった、高校にも同じような土俵があった、高校時代は相撲部は無く、柔道部に属していたが、あちこちのお祭りで開かれる相撲大会には、本物のまわしを着けて参加した。

思い出すのは、小学校低学年の時、双葉山、羽黒山という大物の力士が、佐渡巡業に来た時、着物の帯の禪を着けて、10人位一緒に土俵に上がり、双葉山のお尻を押しした経験、押したというより触ったと言うほうが早いのが楽しかった、学校から各学年3人くらい選抜されての参加だったような気がする、柔道も相撲も全くど素人の域から出なかったが、当時は重量別では無く、全く無差別、60キロ位の身体で100キロ超の相手と対戦するのは当たり前で相撲と同じ、若かりし頃の遠い昔の思い出だ。